



毎回モルゴアをお招きいただきましてありがとうございます！この30年は福島の皆様を支えられてきました。結成当初から毎回取り上げたショスタコーヴィチを約8年間もの間、熱心に耳を傾けてくださったことで、クアルテットとしては若葉マークの私たちの活動のあり方に自信をつけさせて頂きましたし、現在の熟成されたモルゴアの音もそこに起因していると思っております。

それから今日に至るまで、新しい作品に対峙しながらも、愉しみつつ今日まで継続してこられました。

過去につくられた作品は遺物ではありません。ひとりの誠実な生の営みから生み出されたものであればこそ、共感できる瞬間は必ず本番で現れるのではないかと、ということも知りました。共感、というのは確証できないものですが、でもそこ

に、音楽の本質的なものがあるのは論を待たない所でしょう。

改めて思うのは、著名な作曲家の第一級の傑作だけが大切なのではなく、それぞれの音楽の個性を味を嗜むことが、(いささか大げさですが)文化を大事にする姿勢に繋がるのではないかと思うのです。日常において、とかくランク付けしたりカテゴライズすることをしがちな私たちですが、それこそモルゴアはそれらとは断絶して、いろいろな音楽を雑食することでたくましく生き延びてきたのかも知れません。

今回の2年にわたる30年記念公演シリーズの最終回を迎えるにあたって熱烈な「モルゴリアン」の皆様から感謝をいたします。

そしてこれからの活動ですが、長期プランを立てるのは苦手です。言ってみれば、その日暮らした的なやり方が一番似合っていると思っております。で、定期演奏会で有名曲は可能な限り排除する！という看板もとりあえず外すのも良いかもしれませぬ。そこには逆の差別意識が潜んでいない、とも言えないからです。

…というようなことです。高齢化が進む我が国において、「クラシック界のロック(はみ出し)野郎」の代表として、その元気を届けたいことを誓います。

荒井英治



©Norikatsu Aida

第1ヴァイオリン

荒井英治

(あらい えいじ)

元東京フィルハーモニー交響楽団
ソロコンサートマスター

第2ヴァイオリン

戸澤哲夫

(とざわ てつお)

東京シティ・フィルハーモニック
管弦楽団コンサートマスター

ヴィオラ

小野富士

(おの ふじ)

元NHK交響楽団
次席ヴィオラ奏者

チェロ

藤森亮一

(ふじもり りょういち)

NHK交響楽団
首席チェロ奏者

MORGAUA QUARTET(モルゴア・クアルテット)はショスタコーヴィチの残した15曲の弦楽四重奏曲を演奏するため1992年秋に結成された弦楽四重奏団。翌'93年6月に第1回定期演奏会を開始。2001年1月の第14回定期演奏会でショスタコーヴィチの残した弦楽四重奏曲全15曲を完奏。同年4月、第2ヴァイオリンを青木高志から戸澤哲夫に交代。ショスタコーヴィチ没後40年(2015)から生誕110年(2016)をつなぐ「ショスタコーヴィチ弦楽四重奏曲全15曲演奏会」を'15年大晦日から'16年元旦にかけて「横浜みなとみらい小ホール」で開催。一晩で全曲演奏するという瞠目のプログ

ラムで多くの聴衆を集め、4度目の完奏。'12年6月と'14年5月、そして'17年3月に日本コロムビアからリリースした、荒井英治編曲のプログレッシブ・ロック・アルバム《21世紀の精神正常者たち》《原子心母の危機》《トリビュートロジー》により、ボーダーレスな弦楽四重奏団としても高い評価を受ける。2017年9月「第47回JXTG音楽賞 洋楽部門本賞」、2018年6月「第28回みんゆう県民大賞 芸術文化賞」などを受賞。モルゴア・クアルテットの斬新なプログラムと曲の核心に迫る演奏は、常に話題と熱狂を呼んでいる。「モルゴア」はエスペラント語(mor g a ŭ a=明日の)に原意を持つ。